

空き家の再生を通じて、まちの若い担い手を育てていきます。

(広島県尾道市)

特定非営利活動法人 尾道空き家再生プロジェクト 代表理事

とよ た ま さ こ
豊田 雅子



プロフィール

1974年広島県生まれ。尾道市で生まれ育ち、大学卒業後、旅行代理店の添乗員として海外を飛び回る。帰郷後、空き家の再生をきっかけに2007年にNPO法人を設立。

Q NPO法人設立のきっかけについて教えてください。

豊田：もともと尾道で生まれ育ったのですが、大学進学をきっかけに大阪に移住しました。大阪に移ってから、古い建物が残り、車の無い時代に形成されたヒューマンスケールの尾道はいいまちだったと気づき、いつか帰って暮らそうと思うようになりました。学生の時から旅行が好きでヨーロッパをよく訪れていましたが、大学卒業後に旅行代理店の添乗員になったことで仕事でも海外と日本の行き来が増えました。そのうちに、古いものや自然を大切にすることをヨーロッパと、古い建物がどんどん壊されていく日本の大きな違いを実感し、日本のまちづくりに疑問を感じていたので。

戦火を免れた尾道には、古い建物も多く残っていましたが、ちょうどその頃から駅前も変わり、大きなビルも建ち始めていました。また、斜面地や路地など車が通らない地区には放置された空き家が多く存在していました。斜面地は現在の建築基準法では一旦解体すると家が建てられないため、今残っているものを守らなければ、坂のまちとしての景観もコミュニティもなくなってしまいます。そこで、一軒でもいいから尾道らしさを守りたいと思い、個人で購入する目的で空き家を探し始めました。

6年かけて探した結果、“ガウディハウス”と呼ばれる空き家に出会いました。昭和初期に建てられた洋館付きの住宅で、曲線を使った装飾が随所に用いられた建物です。購入して再生したのをきっかけに、個々の動きを大きなムーブメントにしたいと思い、任意団体

として「尾道空き家再生プロジェクト」を立ち上げました。空き家を拠点に何かをしようとする人が増えていたことも背景にあります。

NPOのメンバーは現在190名ほどになりました。

Q 市と協働で実施している空き家バンクとはどういう制度でしょうか。

豊田：空き家を提供したいと考えている大家さんと尾道に住みたいと思っている移住希望者をマッチングさせる制度です。バンクの利用を希望する人は、利用者登録をしたのちに、事務所で空き家物件情報を閲覧することができます。また、NPOでは説明会やガイドツアーなども随時行っています。

以前は市が単独で行っていましたが、2009年10月より市とNPOで協働することになりました。ただし、NPOは不動産会社ではないため、宅地建物取引業法の規制により、物件の説明はできませんし、空き家バンクを実施するのは「地域活性化のための空き家情報提供等の推奨事業」において市が特別地域に指定したエリアのみです。このエリアは尾道三山の南斜面地の山手地区と呼ばれる地域で、「坂のまち尾道」の顔ともいえる場所ですが、高齢化と市街地空洞化が進み、200軒を超える空き家があると言われています。4

年が経過して、これまでに70軒が成約しました。移住者は東京や大阪からも多く、年齢は20～30歳代が中心です。

Q 空き家バンク以外にも、空き家談義、建築塾、チャリティイベントなどさまざまなイベントも行っていきますね。最近ではどういった活動をしていますか。

豊田：2012年秋にゲストハウス「あなごのねどこ」をオープンしました。これは、プロジェクトの再生物件の一つで、うなぎの寝床のように奥行き深い尾道の町家の特産品の「あなご」にちなんで名づけました。ゲストハウスは他の旅人や地元の人たちの出会いや交流に特化しており、暮らすように滞在するユースホテルやB&Bのような宿です。訪れた人に尾道の歴史的な建物に触れてもらい、建物を活用しながら次世代に受け継ぐこと。また、若い移住者の活躍の場の創出と、今までにない観光市場の拡大を目指しています。古くて新しい交流スペースになればと考えています。

このゲストハウスと商店街に面するカフェのスタッフは、再生から空間デザイン、運営にいたるまでNPOのメンバーで切り盛りしています。

Q 今後はどのような活動を展開していきたいですか。

豊田：まずは、これまで通りに空き家を一軒一軒再生することが基本だと思います。あとは移住者も増えているため、若い移住者や尾道に住み続けたい地元の人に仕事をつくり出したいと考えています。「あなごのねどこ」のオープンもその一環です。まちを一時的に再生しても、人が定着しなければまた元に戻ってしまいます。そのためにも、担い手を育てることが大切だと思います。

インタビュー・構成：
城市奈那（株式会社ジェイクリエイト）